

叶え合う支援の実装へ

暮らしと暮らしを重ねるまちに

制度だけに頼らない

病気を抱える、障害がある、生活が苦しい、人間関係が保てない、仕事が続かない―暮らしの中で困り事を抱える可能性は誰にもあります。その時に相談に乗ったり解決に向けたサポートを行ったりする機関や窓口はいくつもあります。しかし、その対象に当てはまらなかつたら、制度には必ず支援の狭間が生じます。

国は地域共生社会の実現を呼びかけています。制度だけではなく地域の関係性も含めて暮らしを支え合える街を作ろうというものです。そして久留米市では、新しい支援のあり方を考える取り組みが進んでいます。「叶え合う支援」です。

解決するだけではなく、願いを叶えるためにいろんな人が関わり合う。そんな視点も必要ではないか。「制度・サービス」と「住民の関わり合い」が2車線道路のように整備されれば、対応できることの幅が広がり、いろんな人の主体性が生まれるのではないかと考えています。

「参加支援事業」を通して実装

現在、「高齢」「障害」「生活困窮」「子育て」など、属性ごとの支援を横繋ぎし、誰も取り残されない支援体制が整備されています。同時に、さまざまな分野で地域の居場所づくりや支え合いの仕組みづくりが進んでいます。その力を誰かの暮らしや困りごとに生かすためには、「接着役」が欠かせません。

久留米市は令和6年度から「叶え合う参加支援事業」を開始。叶え合う支援を理念に掲げて、市民活動団体や企業、地域コミュニティ、そして住民も、何らかの形で個別支援に関わる仕組みを作ります。

多様な人々の関わりを重ねたい

事業を受託しているのは久留米 A U - f o r m a (アウフォーム) 実行委員会(7ページ参照)です。実行委員会の思いは「福祉・支援の概念を広げたい」とある活動団体が「私たちの活動は福祉活動ではないのですが、関わることでできますか」と言いました。しかし、どのような活動であれ、誰かの「居場所」だったり「活躍の場」になったりする大切な力なのです。

あらゆる人 団体、支援機関、企業。それぞれの特徴を重ね合わせて、「暮らしと暮らし」が重なり、関わり合う「街」になれば、久留米らしい地域共生社会に近づけるのではないのでしょうか。



叶え合う支援のポイントは？

そもそも、参加支援事業って？

- ① 希望を叶えると言う視点
課題だけを捉えるのではなく、希望を叶えるという視点を持つこと。
- ② フラットな関係性
支援する人とされる人ではなく、お互いに目標を共有してフラットな関係性に。
- ③ 多くの人の関わりが生まれる
いろんな人の力が生かされる場面を作れる。

社会参加のための「橋渡し」
国は、参加支援事業を「介護・障害・子ども・困窮等の既存制度で対応できない狭間のニーズに対応するため、本人のニーズと地域の資源との間を取り持つことで多様な資源の開拓を行い、社会とのつながりを回復する」と説明しています。公的な相談支援機関が行う支援と、地域の力を生かした支え合いの動きとを橋渡し。さまざまな人や場との接点を作って、社会参加を後押しするのが参加支援事業です。

叶え合う支援が生まれた「久留米らしい重なり方デザイン事業」
公的制度による支援(フォーマル)と、住民同士の支え合いの力(インフォーマル)を重ね合わせて、多くの方が暮らしを支え合う「久留米らしい地域共生社会」。それを実現する手法を探るために、令和4年度に「久留米らしい重なり方デザイン事業」と名付けた委託事業を実施。そこから「叶え合う支援」の理念は生まれました。



同事業について詳しくはココから



今回のグッチョは特別号。久留米市で「叶え合う支援」という理念を旗印に掲げた新たな支援事業がスタートしました。困りごとを抱えた人もそうでない人も、暮らしの中で人と人が関わり合う。そんな街を目指します。